

IBADAIVERS

多彩な者たちが学び、行き交い、探究している茨大のキャンパス。
茨大広報学生プロジェクト & 広報室 & 茨城在住の編集者が取材した
“イバダイバーズ”の世界、ちょっと覗いてみませんか。

わたしたちのDX

茨城大学が本気で取り組む デジタルトランスフォーメーション

【特集】わたしたちのDX

茨大DXの現在 | インタビュー

羽瀨 裕真 茨城大学情報戦略機構長 2

農学部のDX

農学部で芽吹く
持続可能な農業のシーズ 4

イバダイバーズの声

「わたしとDX」 6

特別対談

「DXによる意識変革が
促進させる共創の機会」 8

茨城大学 太田 寛行 学長

株式会社ユニキャスト代表取締役 三ツ堀 裕太 氏

【コラム】アカデミアIBADAI

研究に恋して

理工学研究科(理学野)教授 中井 英一 10

茨大の「あの日」| 1968年11月16日

三島由紀夫が茨大講堂で講演 11

【茨大広報学生プロジェクト編集ページ】

茨大生100人アンケート 12

茨大ほっとステーション 13

先生、ちょっといいですか?

～茨大教員の素顔を調査!～ 14

茨大関連施設にDIVE! 15

【コラム & ニュース】

つながるイバダイバーズ 16

IBADAI NEWS UPDATE



わたしたちのDX

茨城大学が本気で取り組む デジタルトランスフォーメーション

茨城大学情報戦略機構長 羽瀨 裕真が語る 本学におけるDX推進ロードマップ

「DXとは、つまるところ意識変革なのです」

たとえば、手紙がメールに、メールがチャットに変わってもそれはIT化であってDXではない——そう語るのは、茨城大学のDXを担う組織として新設された「情報戦略機構」で初代機構長を務める羽瀨裕真副学長です。「大学のDXは総じて遅れている」と話す羽瀨機構長。では、茨大のDXをどう進めていくのでしょうか。

1 茨大DXの現在

DXの戦略を担う新組織

茨城大学では、2022年4月、これまでのIT基盤センターを改組して新たに「情報戦略機構」を立ち上げました。IT基盤センターが担っていたインフラ整備の御用聞きのような役割から脱却して、デジタルを使って大学として新しいことにチャレンジする——まさにDXですね——それを戦略的に考え、提言する組織へとステップアップしたいと思っています。

戦略の上位にあるのは『イバダイ・ビジョン2030』です。そこで掲げられた研究、教育、業務の目標を2030年までの8年間で達成するためには、その前提となるDXは半分ぐらいの期間で進めないといけません。業務のやり方、考え方を変えないといけません。大学のDXは総じて遅れているといっていると思います。他大学の事例報告などを聞いて

学内はもちろん、
他大学や地域までを視野に入れた
デジタル環境充実化への取り組み。

PROFILE

羽瀨 裕真 (はぶち・ひろまさ)
茨城大学副学長 (情報・DX)、情報戦略機構長。1992年埼玉大学大学院工学研究科博士後期課程修了。博士 (学術)。茨城大学大学院理工学研究科 (工学野) 教授。専門は通信工学、情報通信工学。学長特別補佐を経て、2022年4月より現職。図書館長も兼務している。

セキュリティポリシーやサイバー対策等基本計画の更新も、他の大学と比べても割と早く取り組んでいる方だと思います。ただ、インシデントをゼロにするのは不可能ですから、起きたときにどう対応するかという準備も大事ですね。

一方、教育や業務に利用する各種情報システムについては、まだ組織ごとに仕様がバラバラで、効率が悪いところがあります。大学全体でのマネジメント体制を強化しないとダメですね。ただ、情報戦略機構がすべてを手がけるというのも無理がありますし、それでうまくいくわけでもありません。各システムの仕様のたたき台は各部局自身がつくれるようになって、機構と一緒に実装を進めていけることが理想です。そのためのサポートはしっかりとやっていきたいです。

今回情報戦略機構では、情報システム、情報セキュリティ、デジタル改革推進、データ戦略という4つの部門を立ち上げました。このうちデータ戦略の部門では、データをどう流通させるか、どう収集して見せていくのか、ということに取り組んでいます。今は学内でさまざまな種類のデータが散乱している状態ですが、今後は各部局が決まった仕様のデータを一か所に提供しておいて、そこにアクセスすれば良い、あるいはBIツール (Business Intelligence tools) などを使って見せていく、ということができればと思います。既に大学戦略・IR室や広報室などと連携して具体的に進めているところですよ。

教育、研究のあり方をより高度なものに

とはいえ、重要なのはやはり、DXによって教育、研究のあり方をより高度なものにしていくことですね。教育に関しては、たとえば学生の履修科目の内容や成績の情報と、日々の出席状況や資料のダウンロード時間といった情報とを組み合わせることによって、教育の効果や改善の議論ができるようになるのではないかと思います。こうした取り組みは「教育の質保証」のシステムを独自に構築してきた本学におい

DXと茨城大学に関する4つの基本Q&A

Q1. DXとは？

A. デジタルトランスフォーメーション。情報技術の進展による社会・文化の変革を表した言葉。

Q2. 大学や教育機関のDXの現状は？

A. リスクも見極めながら試行錯誤中。

Q3. 茨城大学情報戦略機構とは？

A. 「スマートユニバーシティ」を目指してデジタル化の戦略と推進の担う司令塔。

Q4. 地域社会への影響は？

A. 茨大の経験や知見を教育機関や図書館を通じて地域社会へも波及したい。

てはさらなる強みとなるでしょう。

研究に関しては、さまざまな実験データ、メタデータを公開し、オープンサイエンスを推進していくことが重要です。ただし、単純にオープンにすれば良いということではなく、それを使う人がいなければオープンサイエンスにはつながりません。これは茨城大学単独ではなく、他大学や研究機関、あるいは国の動きと連動させながら、研究環境を充実させていきたいと思います。

また、茨城大学としては地域との連携も重要です。私は今年から図書館長も務めていて、県内の図書館の皆さんと話す機会があるのですが、公共図書館においては自治体の投資が少なかったり、ネットワークがあまり整備されていなかったりして、なかなかデジタル化が進んでいないことがわかりました。この点では、大学から実績を踏まえた具体的な提言ができると思っています。また、本学の教育のDXの取り組みについても、教育学部の附属学校園を経由して地域の教育へと広げていくことができるのではないのでしょうか。茨城大学の存在を通じて地域のデジタル化が進んだと、地域の方々に実感していただけるようになると良いですね。

こうした取り組みを進めていくためにも、誰かがつくった戦略にみんながただ乗っかるということではなく、学内の構成員のひとりひとりが責任をもってDXに取り組んでいくことがきわめて重要です。そうした主体的な取り組みは達成感につながって心が前向きに変わり、それで茨城大学が変わっていく。情報戦略機構では、学内の教職員へ向けた外部講師によるDX講演会も開いています。DXといいながらも、一番狙っているのはマインド・トランスフォーメーションなんです。(談)



情報システム、情報セキュリティ、デジタル改革推進、データ戦略の4部門で活動を展開

DXの達人たちによる 講演を開催



楽天グループ株式会社
メディアソリューションズ事業部
システムエンジニアリング課
シニアマネージャー

岡崎 功氏

「DXを組織の総合的な戦略の一部に位置付け、学生や教職員、地域などに新たな価値を創出するため、PDCAを繰り返してまいります。茨城大学の特徴でもある「教育の質保証」の活動の中で検討するのでもいいですね。」



株式会社鹿島アントラーズ・エフ・シー
代表取締役社長

小泉 文明氏

「組織としてどういった変容をしていきたいか。未来像を定義しないとデジタルを活用する意味がなくなってしまいます。CX (Corporate Transformation) を皆で議論しながら、理想の組織や働き方について考えることが大事です。DXはその手段の一つ。試行錯誤しながらひとつずつ課題を解決していきましょう。」



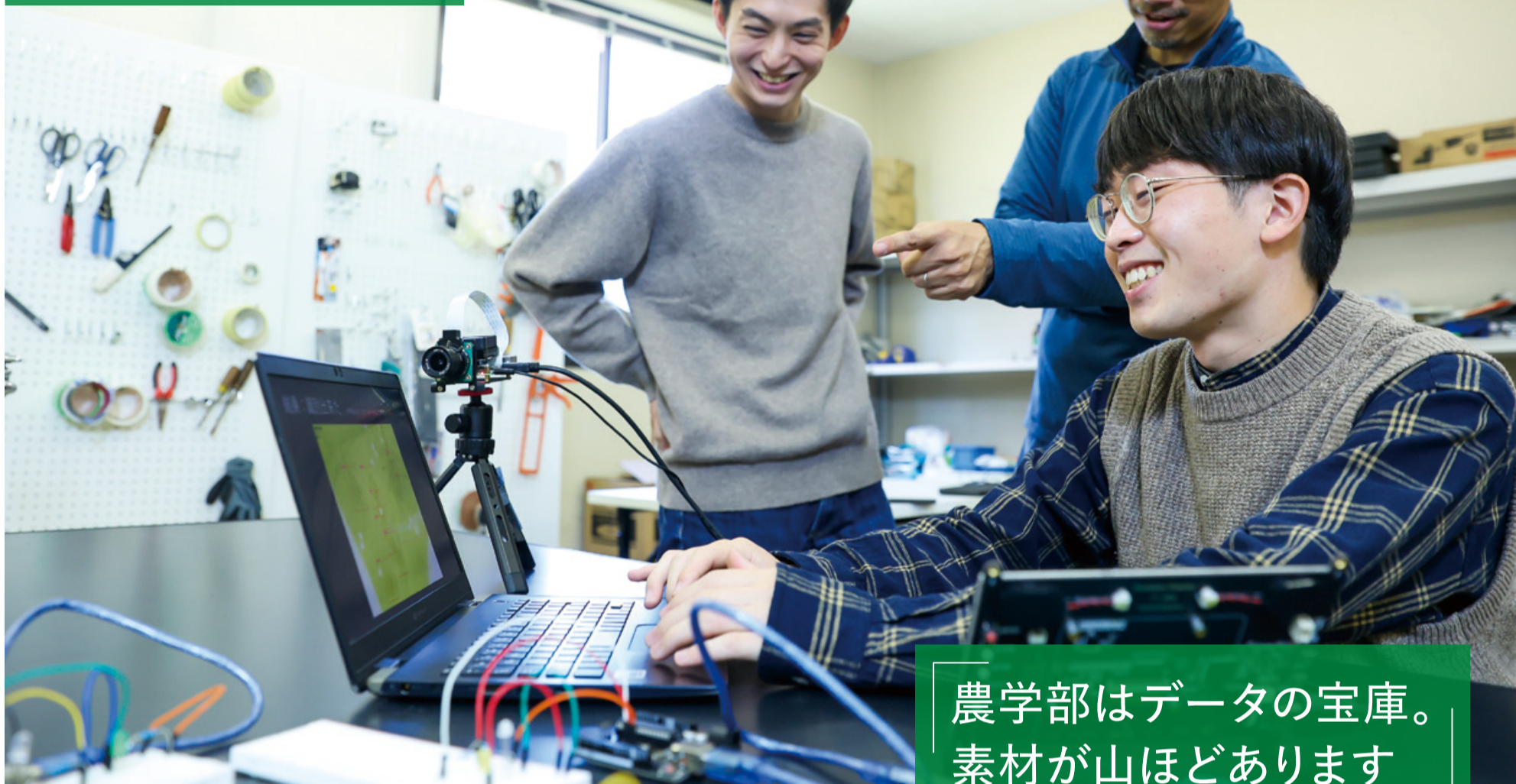
茨城県政策企画部
情報化統括監 (CIO)

谷口 英宣氏

「組織でDXを推進していくには、ビジョンの共有が最も重要だと思います。目的を明確にしたうえで、デジタル技術をそのツールとして活用することが大切です。第2次茨城県総合計画における基本理念は「活力があり、県民が日本一幸せな県」。行き詰まったらこの理念に立ち返って判断しています。」

農学部で芽吹く 持続可能な農業のシーズ

デジタルが導き、広げる
自由でユニークな研究世界



農学部はデータの宝庫。
素材が山ほどあります

農学部 地域総合農学科 3年 益子 優希



必要な機能を組み
合わせるスキルこそが、小規模農家を助ける
と思うんです

農学部 教授 岡山 毅

2 農学部のDX

阿見キャンパスの農学部と、広大な国際フィールド農学センター。生き物たちがうごめく環境で、DXへの独自の取り組みが進んでいます。

電動ドライバーが吊り下がった穴あきボード、作業台の上のカラフルなケーブル、コンデンサなどの電子部品……ここは工学部ではなく農学部の特殊実験棟内の一室だ。農学部地域総合農学科の益子優希さん（3年が開いたノートPCの画面を、大学院農学研究科の磯崎友輔さん（修士1年）がのぞき込んでいる。

二人の出会いには2021年の冬。岡山毅教授の呼びかけで企画され、他大学の農学系の研究者や学生も参加した「物体認識AI勉強会」というオンラインコミュニティの場だった。約1カ月の間に計4回のセッション。各参加者がAIに認識させたいもの——キャベツや昆虫！——を持ち寄り、役立つアプリやプログラム、活用のアイデアについて意見交換した。「あれはおもしろかったですね。次やるときは講師側の立場にもなりたいです」（益子さん）。

岡山教授に触発されて始めた カイコの幼虫のAIによる行動解析

益子さんが茨大農学部に入學した2020年4月は、新型コロナウイルス感染症による最初の「緊急事態宣言」の直前。大学のほぼすべての活動がオンラインになった。「ずっと獣医師になりたかったんです」という益子さんは、大学進学でその目標を変更せざるを得なかった。失意のステイホーム期間中に始めたのが、プログラミングと機械学習についての独学。「気持ちを切り替えて、10年後、15年後に自分がどうなっているべきかを考えてやり始めたらハマったんです」。

2年次になって水戸キャンパス（ほとんど通えなかった）から阿見キャンパスへと拠点に移る。そこでいろんな教員と出会い、おもしろそうな教員には果敢に話しかけ、貪欲に知識や考え方を吸収した。その1人が岡山教授だった。

岡山教授の専門は農業工学。動物の行動の映像解析などに取り組んでいて、研究室には極小パソコンとも言われるマイクロコンピュータ（マイコン）や小型カメラなどがあつた。2022年度から農学部で始まった「農学分野データサイエンス教育プログラム」の監修も務めており、「物体認識AI勉強会」の開催はそのプレイベントのような位置付けだった。

勉強会で刺激を受けた益子さん。さっそく

岡山教授からマイコンなどを借り、気の向くままに使ってみた。まずはカイコの幼虫の行動解析。飼主である益子さんの存在をカイコが認識しているかを知るために、箱の内側の一角に益子さんの顔写真を貼りつけ、カイコの動きを3日間定点撮影。その動画をAIに分析させたところ、カイコは箱の中を動き回りつつも、顔写真の付近にいる時間が一番長いように見えた。「これって僕の顔を認識しているということかな、と。有意差とかとっていないので学術的とは言えませんが、こういう研究はおもしろいなと思いました」。

自由に自己実験に取り組んでいる益子さんに、大学院生の磯崎さんも触発された。自身はプログラミングの経験はゼロだったが、研究対象としているマウスの行動解析にAIの活用は欠かせなくなるという予感を改めて強めた。現在、益子さんと岡山教授とはチームコミュニケーションツールのSlackを使って頻りにやりとりをしている。磯崎さんの指導教員である豊田淳教授もメンバーだ。「このチームでの活動を通して自分の研究世界が一気に広がった感じがします」（磯崎さん）。

農場での収穫実習に登場する 複数のスマート機器

打って変わってこちらは農学部の附属農場

である国際フィールド農学センター。この日は赤く実ったばかりのカキを収穫する実習だ。冒頭、段取りを説明する小松崎将一教授が掲げた小さなヘアドライヤーのような形のは、ハンディタイプの非破壊糖度計。果実をカットしなくても甘さを計測できる機械だ。先端部分を果実の表面に当ててボタンを押すと、液晶画面に糖度が表示される。大きな農家にはベルトコンベアがセットになった定置型の糖度計もあるが、ハンディタイプのは場所をとらず、収穫前の状態でも糖度を測れる。データはExcelの形式で引き出すことができる。学生たちにはそのデータの分析が宿題として課された。

収穫したカキをコンテナに丁寧に並べる学生たち。そこに、キーンという高い音を立ててキャタピラーのついた荷台がトコトコ走り寄ってきた。学生たちがカキの詰まったコンテナをこの荷台に乗せると、荷台はまた別の場所へと移動していく。現時点ではラジコンのように近くにいる人が操作しているが、近い将来にはGPSを利用した自動走行になるだろう。

学生たちに非破壊糖度計の使い方を手ほどきしていたのは、TA（ティーチング・アシスタント）の王嘉憶さん。大学院農学研究科の修士1年、中国からの留学生だ。ブドウの有機栽培を学ぶ。ブドウが鈴なりになっているビニールハウスにはところどころにセンサーやカメラが設置されていて、王さんは手元のスマートフォンで

ハウス内の状況を常にモニタリングできる。取材中、王さんはその画面を見せながら、「夜になるとハクビシンのような害獣が入ってきていることがあったのでハウスの屋根を密閉したのですが、そうすると湿度が上がりが過ぎてしまう。なかなか難しいですね」と説明してくれた。

遊び心から生まれる自由な発想が 小規模農家に役立つ研究を生む

デジタル技術を活用した効率的で高度な農業が「スマート農業」として注目されている。国際フィールド農学センターにおける設備投資も、「農学分野データサイエンス教育プログラム」のスタートも、スマート農業の普及を見据えたものだ。

スマート農業という大規模な生産管理体制を思い浮かべるかもしれない。しかし、岡山教授の視点はやや異なる。「僕自身が関心をもっているのは、個人農家の人たちが活用して、持続可能な農業ができるような技術や環境です」。

定置型の非破壊糖度計にせよ、農場を縦横に巡らすセンサーにせよ、独自の高度な管理システムにせよ、設備投資には大きなコストがかかる。個人では手を出しづらい。一方、個人がちょっとした知識やテクニックをつけて工夫すれば、無料や安価でも使えるサービスは結構ある。

「この自動荷台も、大量生産されている既製品ではないんです。業者さんが小さなユニットのデバイスを組み合わせて作ってくれたものです。GPSセンサーのようなデジタルのユニットをレゴブロックみたいに組み合わせて必要なものをこしらえられるスキルの方が、小規模の農家の助けになるはず」（岡山教授）。

益子さんまさにそういうタイプだ（農家を目指しているわけではないけれど）。菊田真吾准教授（昆虫科学）の研究室に所属が決まり、さっそく手持ちの映像解析技術でアブラムシの個体数を数えてみせたら、菊田准教授も強い興味を示してくれたという。「昆虫とか果樹とか、農学部にはデータのもとなる素材がいっぱいある。いろいろと試しながら腰を据えて取り組むテーマを見つけていきたいです」（益子さん）。デジタル技術を柔軟に使う（遊んで）みせる自由さが、農学部の研究や教育のアプローチに変化をもたらし、DXの扉を開きつつある。

わたしたちのDX

茨城大学が本気で取り組む
デジタルトランスフォーメーション



3 イバイバーズの声

わたしとDX

茨城大学の各部門の教員、職員、学生たちは、「DX」をどのようにとらえているのでしょうか。普段の仕事や学修の話からデジタル社会の展望まで、それぞれが語る多彩なDX論をどうぞ。



PROFILE●福島県出身。民間企業の営業職を経て2019年から現職。回転寿司で一番目に食べるのはイカオクラ。スマホ依存気味なのでデジタルデトックスを検討中。

大学をめぐるいろいろなデータと向き合って4年。大学運営にもっと役立つような形でデータを加工、可視化できるよう日々奮闘中です

大学戦略・IR室 職員 松葉 杏里

「IR」というのはInstitutional Researchの略です。学生数や教員の研究動向、外部資金の獲得状況など学内のさまざまなデータを収集、整理して、大学運営に役立つような形で提供する仕事です。

大学のデータは意外と複雑。たとえば「社会人学生の数」といっても、その定義や調査時期によって数字が変わってきますから、各部署と細かい調整をしなければなりません。また、確定した数字を他大学と比較してみると、茨大は意外と数が少ない、といったことも見えてきます。逆に、データ上では結構すごいのに大学の強みとしては発信できていない取り組みも見えたりします。こうした気付きが事業の見直しや新しい計画へとつながっていくと、普段の仕事にもさらに手助けを感じられますね。

次の課題は、データの出入力がバラバラな現状を見直し、統合してシンプルに扱えるようにすることだと思います。他の部署と協力しながら、いろんなBIツール（データ分析・可視化のアプリ）を試しつつ少しずつ進めているところです。



子どもたちが最新のサイボーグに触れる体験が、未来の技術への構想と社会の課題を自分ゴトとしてとらえるきっかけに

教育学部 助教 川路 智治



PROFILE●茨城・広島県内で教員を務め、2021年に広島大学で博士号（教育学）取得。同年4月より茨城大学に着任。専門は技術教育。

医療や介護などの目的で使われるCYBERDYNE株式会社開発の装着型サイボーグ「HAL（ハル）」を活用した中学生向けの教育実践を開発し、県内外の協力校で今年度から実験的に展開しています。

HALは、人間が身体を動かそうとする際に脳から神経、筋肉へと伝えられる微弱な信号を皮膚の表面から読み取り、装着者の意思に沿った動作を補助することで身体機能を改善していくサイボーグです。中学生たちはHALを装着し、装着前後で自分のジャンプの高さが向上する即時効果を体験する中で、人と技術の関係を直感的に理解してくれました。あわせて身体に関する個人情報を活用した技術の倫理的な側面についての考えを深めたり、多角的な視点で新たな技術を構想したりするきっかけにもなっていました。

こうした技術教育における授業実践はSociety5.0時代において重要になると思います。教員を目指す研究室の学生たちと協力してさらにブラッシュアップしていきたいですね。



PROFILE●東京都出身。専門は政治思想史。2020年に茨城大学に着任。著書に『〈助言者〉ホップズの政治学』（風行社、2021）。中高大とオーケストラに所属し、音楽は人生の一部。

メタバースにおいて異質な他者との『差異の政治』が可能か、は興味深い問題です

人文社会科学部 講師 上田 悠久

オンラインで公共哲学の授業をやってみて、対話はある程度成立するものの、先にオフラインで関係性ができていないと深い議論は難しいとも感じました。今後の技術革新で変わるかもしれませんが。

その意味で、メタバースのような仮想空間で異質な他者と出会い、同質性を前提としない「差異の政治」が可能か、というのは興味深い問題です。現実世界では異質な他者を物理的に消せるわけではなく、なんとか共存の道を模索するわけですが、メタバースではそうした異質な存在を運営側が簡単に排除できてしまうし、行動のログもとれてしまう。

一方、対面のコミュニケーションにトラブルを抱えている人などには、国家、家族、職場だけでない別のコミュニティをもてるメリットがあります。複数のコミュニティのひとつとしてのメタバースは良いと思います。だからこそその運営ルールについて、政治空間の構築という面からも議論が必要でしょう。



PROFILE●つくば市出身。土浦第二高等学校を卒業して2022年4月に茨大に入学。現在はひたちなか市に住み、自転車で通学中。

大好きなApple製品で動くオリジナルのアプリを作りたくて独学で開発。便利なものを作って友達と気軽にシェアしたい

工学部電気電子システム工学科1年

川七 崇之



中学生になるときに親にiPadを買ってもらってからApple製品の虜（とりこ）です。だんだん自分が作ったアプリをiPadやiPhoneの画面で動かしたいと思うようになり、大学に入ってから独学でアプリ作りを始めました。

最初は、自分の好きなホラー映画の中に出てきた、死ぬまでの時間が表示されるカウントダウンのアプリを作ってみました。もちろん時間は適当ですけど（笑）映画と同じようなデザインで。そのあと、今度はもう少し役立つものにしよと思い、時間割を入力して友人とシェアできるアプリを作ってみました。教務情報ポータルとかのリンクも付けて、茨大生仕様に。友達にも評判がいいです。

茨大では公式アプリは作らないんですかね？ こうやって学生のアイデアとか悩みとかを採り入れて、みんなで大学生活をどんどん便利にできるような活動があると嬉しいと思います。



PROFILE●京都府出身。専門分野は統計力学、非平衡物理学、生物物理学。

自動生成される大量のデータに溺れず、それをどう料理し、本質をつかめるか。そこに個人の人的成熟が如実に出てくると思っています

理工学研究科（理学野）教授 中川 尚子

1980年代にはコンピュータが身近になり、物理学でも数値実験というカテゴリが誕生して、研究の取り組み方が変わっていったんです。そこに今はAIが出てきた。GoogleのAlphaGo（アルファ碁・コンピューター囲碁プログラム）で私たちは機械学習の進化を目の当たりにしたのですが、数値実験においてもAlphaFold（アルファフォールド）という、タンパク質の構造を予測するAIプログラムが出ています。難しいことを考えなくてもAIがタンパク質を動かして、これだというもの自動的に探してくれるんですね。人が時間も手間もかけてやってきたタンパク質の構造決定だけど、これからはそこはAIがやることになって、人間はAIのサポートを受けながら新しい研究分野を作り出す方向に乗り出すでしょう。パラダイムシフトにつながりそうで、ワクワクしています。

これらの大量のデータは学術分野の融合を牽引すると思いますが、これからの学生や研究者には「データに使われない」ような抵抗力や俯瞰力が求められます。自動化してあれもこれも出てくる中で、物理学の歴史的体系の中で残っていくようなシンプルで心地よいルールを選ぶ「目利き」が必要でしょう。目利きになるための経験を積める教育を、私もしていきたいです。



PROFILE●小学2年生のときに家族でパキスタンから日本へ移住。新潟県内の高校を卒業し、2017年に茨城大学工学部情報工学科入学。水戸市内のクラブで毎月DJイベントも主催。

社会のデジタル化への不安に対しては、疑似体験できる媒体があるといいですね。どうしたら安全に使えるかに関心をもつ方がポジティブだと思います

理工学研究科 博士前期課程1年 ムハマド ウスマン

ブロックチェーンにおける電子署名のプロトコルを研究しています。今後ブロックを早く作る技術とあわせて、量子コンピュータでも解けない暗号技術の確立も必要です。仮想空間がもっとメインになってきたときに、透明性の高い社会になった方がいいですから。

僕がサイバーの世界に興味をもったのは『マトリックス』や『レディプレイヤー1』といった映画がきっかけです。映画や小説で未来のイメージを共有しながら、みんなでデジタル社会をどう安全にするか議論できるといいですね。

将来はIT系の企業の研究者としていろんな地域で働きたいです。ものづくりの上ではプロトコルだけでなく、すべての人が接しやすいインターフェースも考えなければ普及しません。たとえば左から右へ文字を書く人と、ウルドゥー語のように右から左に書く人とは、「戻る」「進む」の表示の認識が違うと思います。いろんな方と交流しながらユーザーのイメージを広げて研究や仕事にも活かしていきたいです。

茨城大学全学を対象として展開中 「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」

P4-5の記事に登場する農学部独自の取り組み「農学分野データサイエンス教育プログラム」のほか、茨城大学では全学を対象とした「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」も用意しています。このプログラムは文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」にも認定されているものです（認定の有効期限：2027年3月31日）。数理・データサイエンス・AI教育プログラムは、「基礎教育パッケージ」と「プロジェクト科目」で構成されています。「プロジェクト科目」については、全学教育機構と地球・地域環境共創機構（GLEC）が連携して、GLECが有する知見や茨城県内の環境・防災データ等を活用し、地域環境や気候変動の影響を分析するなど、多様化する社会における実践的適応力を養成します。

4 特別対談

DXによる意識変革が促進させる共創の機会

特集の最後を飾るのは、茨城大学の太田寛行学長と、茨大OBでIT起業家の三ツ堀裕太氏との対談です。話題はDXの枠を越え、大学での学びの深め方、日本人起業家が海外に挑戦する際の心得、そして、地域で学び働くことへの矜持へと展開していきました。

DXは、新旧の考え方を混ぜ、新たな価値感を構築する好機

太田 本学では、2022年度から情報戦略機構を立ち上げ、本腰を入れてDXを推進しています。三ツ堀さんは、本学在学中に起業し、日立市を本拠地として地域の活性化を常に視野に入れながら、米国のシリコンバレーにも拠点を設けて活躍していらっしゃいます。ぜひ豊富なご経験からDXについてのお話を伺えればと思います。

三ツ堀 私は、DXを専門にしているわけではありませんが、そもそもDXという言葉が何を指しているかという、おそらく過去のやり方を一度抜本的に見直して論理的に考え直した結果、このやり方のほうがスマートで本質的だということを通り過ぎて、これまでのやり方にミックスしていくということなのだと思います。たとえば、この会社の受付はAIロボットが担当していますが、“おもてなし”という日本の伝統的な習慣を考えた対応を取り入れています。DXという言葉がちょっとバズワードのようにになっている今の状況は、新旧の考え方をガチャガチャとかき回して、新しい考え方を構築するいい機会なのだろうととらえています。

太田 大学でも同じような意識改革が起きていると感じます。そして、やはりコロナの影響はとても大きかったですね。長い間維持してきた具体的な礼儀作法が表現できなくなり、オンライン化せざるを得なくなったとき、その変化をポジティブにDXという言葉で表そうとした側面もあるんですよね。

三ツ堀 確かにそうですね。コロナがきっかけでスピード感が増し、DXの定

義もだいぶ拡大された感じがします。

スピード感とチャレンジ数 シリコンバレーとの圧倒的な差

太田 三ツ堀さんはシリコンバレーにも拠点をもちますが、現地でのDXはどのような状況でしょうか。

三ツ堀 実は、シリコンバレー支社は人材面から一旦閉じてしまったんですが、変わらず事業の拠点のひとつにはなっています。DXという視点からは逸れるかもしれませんが、現地で私が体感したことをお話させていただくと、シリコンバレーは、企業同士が協業・連携して共存するエコシステムとしてはかなり先を行っている部分はあります。ただ、技術単体で見れば、自分たちの力も決して見劣りするものではないと感じています。圧倒的な違いは何かと言えば、それは、チャレンジの絶対数とそこに挑む勢いです。驚いたのは、何百社もが入るインキュベーション施設があるのですが、そこで知り合ったたくさんの方々が、半年後に訪れたときにはただの1人も残っていないという状況です。半年でここまで劇的に変化する世界が、同じ地球にあるのかと本当に驚愕しました。

太田 そのスピード感は、社会にどういうプラスをもたらすと感じますか。

三ツ堀 いい面とそうでない面があると思います。よいものを生み出すスピードを加速させる効果はあると思いますが、研究には時間をかけて積み上げて初めて達成し得るという面も大きいですね。シリコンバレーの起業家たちは、例えるなら、若手のお笑い芸人のような印象です。ひな壇に並ん

わたしたちのDX

茨城大学が本気で取り組む
デジタルトランスフォーメーション



共創は茨城大学のテーマでもあります。ぜひこんな場を学内にもつくってみたいですね

地域にも実験的でワクワクするような共創、創発の場があると示したくてこのコクリエを創りました

茨城大学

太田 寛行 学長

PROFILE | 1997年より茨城大学農学部で教鞭を執り、2010年同農学部長・大学院農学研究科長に就任。2014年副学長（大学戦略・IR）、2016年理事・副学長（教育統括）を歴任し、2020年4月より現職。専門は土壤肥科学、微生物生態学。

が納得できるロジックは必要です。結局は、自分の内側から湧き出るエネルギーを正しく生かす道を自分で選択することが、学びを深めるためには欠かせないですね。

地域に誇りを持てるような場を共創、創発の力でつくりたい

太田 地域とご自身の関係性については、どのようにお考えですか？

三ツ堀 私は、日立や茨城も大好きです。最近反省しているのは、地方や地域について語る広報戦略として、「ここの研究室からこの大手企業に入りました」といった情報が効力を発揮する部分も、それぞれのメリット、デメリットを理解

でいてチャンスが来たら、司会の人に「はい！はい！俺にまかせてくれ！」と、胸を張って手を挙げる。自信があってもなくてもです（笑）。一方、たいの日本人は95%完成していても、「いや、まだ全然できてなくて…」と言って手を挙げない。チャンスを前にして強さを発揮するのは、前者なわけですが、実際に要求に応えられなければ自滅してしまうことも多くて…。

太田 自己アピールは必要でも、「嘘をつかない」ということは、研究でもビジネスでも原則ですね。

三ツ堀 ええ、特に日本人には、とにかくいつでも手を挙げなさいというスタイルは、ちょっと対応し難いです。ただ、手を挙げない限り土俵に上がりませんが、求められていることと自分の実力とのバランスをいかに的確に判断してタイミングよく手を挙げられるか。それが、海外に限らずビジネスにおいて重要なことだと実感しています。

横道にはずれるときは逃げずにまずは自分の中で筋道を通す。

太田 日本はどここの学部もしっかり

したカリキュラムがあって体系的な学びが尊ばれています。その半面、ちょっとした興味や気づきに導かれて脇道に逸れるチャンスというのがつくりにくい気がします。私自身、学生時代は農学部で土壌微生物を研究し、その後、自身の興味を追求する形で別の大学の歯学部に進んで口腔細菌学を学ぶという経験をしました。学際的な学びがもっとしやすくなるいいなと思います。

三ツ堀 先生のように、ご自身の中で脇道に逸れることへの筋道がきちんと立てられていて、そこにポジティブなエネルギーを注げるときは、大いに意義があると思います。一方で、私の中でインターンとして迎える学生の中には、現実逃避のために横に逸れようとしている人がいることも事実です。単位が取れていないのに創業を考えたり、転部や転学を考えたりとか。「おおい、もう少し長期的に自分が将来何を生業として生きていきたいのかについて仮の道筋を立ててからじゃないと難しいぞ」と、そういう若者には厳しく伝えています。

太田 確かにそうですね。自分自身

株式会社ユニキャスト代表取締役

茨大OB

三ツ堀 裕太 氏

PROFILE | 2007年茨城大学大学院理工学研究科博士前期課程システム工学専攻修了。茨城大学工学部在学中の2005年に株式会社ユニキャストを設立。現在はロボティクス事業やITサービス事業を展開しつつ、地域貢献型シェアハウス「コクリエ」も運営し、テクノロジーの力で地域社会を明るく幸せにすることに情熱を注ぐ。

は、親世代の感覚というものも大きく作用しますからね。

三ツ堀 この『コクリエ』という場を作ったのも、まさにその理由からなんです。「茨城にも活躍している人がごろごろいるぞ」ということを示すためには、何かシンボリックなものが必要だと思ったんですね。人材育成に加えて、新しく何かを立ち上げようとする実験的でワクワクするような空気感を体現できるような場をつくらうと思って。僕は集合知、群知能の研究をしたことがあるんですが、最低限のルールを決めた上で、いろいろな人がいろいろな動きをすると、想像してない情報が効力を発揮する部分も、まだ確実にあります。大学入学や就職に

は、親世代の感覚というものも大きく作用しますからね。
三ツ堀 こちらこそ、母校の広報紙で学長と対談させていただく機会を得て、とても嬉しい気持ちです。これからどうぞよろしくお願いいたします。

称をco-creationを元に『コクリエ』と名付けたんです。
太田 茨城大学も現在「共創」をテーマにしていますから、それはとても共感できるお話です。誰かひとりが引っ張っていくというよりも皆で何かをやりながら、新たな価値を生み出していくことが理想ですね。実際、今日ここにお伺いして、今私の頭の中に、こういう場をキャンパス内にもつくりたいかなという考えがさきほどから浮かんでいます。ぜひこれからも共創の関係を築けたらと思います。今日はありがとうございました。

三ツ堀 こちらこそ、母校の広報紙で学長と対談させていただく機会を得て、とても嬉しい気持ちです。これからどうぞよろしくお願いいたします。

ACADEMIA IBADAI

知のプラットフォームとしての
茨大のよりディープな側面を、
さまざまな視点からご紹介します。

COLUMN

研究に恋して

理工学研究科(理学野)教授 中井 英一

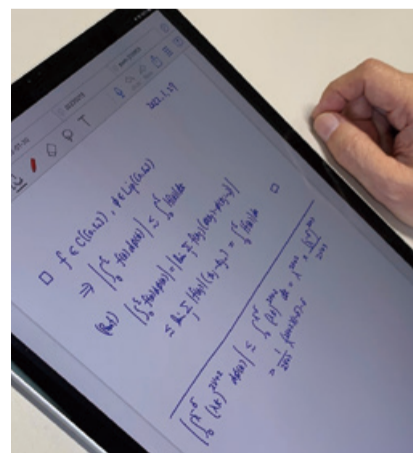
日本数学会解析学賞を受賞した今も、
100年後まで“語り続ける”論文執筆への
意欲を燃やす生粋の数学者



り組みはじめた頃、中井教授は一冊の本と出合う。『How To Write Mathematics』というタイトルだったか、論文の書き方についての本を読んだんですね。そこには、『あなたが書いた論文は、あなたのために永遠に語り続ける』という趣旨のことが書かれていたんです。

「あなたのために永遠に語り続ける」とはどういうことか。当時はピンと来なかった。ところが、それから長い時を経て中井教授は突如その意味を知ることとなる。「変動平均振動量をもつ関数空間」に関する人生初の論文が、執筆から約20年後、「変動指数をもつ関数空間」に関する論文で引用されるようになり、さらにその後も引用が繰り返されるようになったのだ。

「リーマン幾何学が19世紀後半に研究されて、それが20世紀のアイン



「今でも計算は手でしますよ。最近は紙よりタブレットの方が便利ですけれどね」

シュタインの相対性理論につながったように、数学の理論の進展が物理の新たな発見や発展につながるといふ事例はたくさんあります。最近の例だと、素数などを扱う整数論は応用には全く無縁と思われていたのに、今やブロックチェーンなどの技術の基盤となる暗号理論にとって欠かせないものになっていますね。

だからこそ、自らの手を離れた論文が、20年という時を隔てて新たな「応用」を生んだという報せに、教授自身も驚かすにはいらなかった。「あなたが書いた論文は、あなたのために永遠に語り続ける」ことを、身をもって実感した瞬間だった。

中井教授は今年(2023年)、65歳の定年を迎える。「これまでの教え子たちがだいたい40歳代になって、日本から世界へ飛び出して活躍しています。数学の研究に国境も組織の壁もありません。私もまだまだ、100年後に応用されるような、そういう論文を書きたいです」。

PROFILE 中井 英一 (なかい・えいいち)

理工学研究科(理学野)教授
1984年茨城大学大学院で理学修士、1993年に奈良女子大学大学院で博士(理学)を取得。高等学校教員、工業高等専門学校教員、大阪教育大学教授などを経て2011年に茨城大学に着任。専門は解析学。2022年度、日本数学会解析学賞を受賞。

「まず数学についてお話ししますと、研究をするときは応用を考えているわけではなくて、純粋に理論を構成しようというところで研究するわけです」。

穏やかで折り目正しい理工学研究科(理学野)の中井英一教授の口調に、思わず熱がこもる。眼鏡の奥にのぞくまなざしは、数学という学問の歴史の大海原をとらえている。

中井教授の専門は、「変動指数をもつ関数空間」とそれを利用した解析学(より詳しくいうと「実解析」「調和解析」)の理論構築だ。

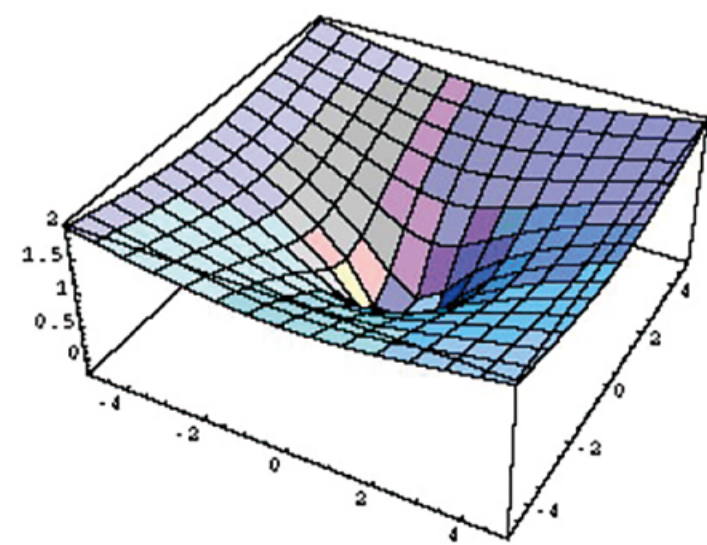
関数空間というのは、異なる複数の関数 $f(x)$, $g(x)$, $h(x)$ … の関係をひとつのベクトル空間に落とし込んだもの。この関数空間をうまく作り、活用することで、関数同士(たとえば $f(x)$ と $g(x)$) の距離をとらえたり、ある条件を与えた関数の変換を図形的に解析したりすることができる。微分・積分のような解析学と、ベクトルを扱う代数学、図形を扱う幾何学とをつ

なく、それが関数空間だ。

古典的な研究で扱われていた関数空間は、空間内のどの位置でも連続性や可積分性が一定に保たれているシンプルなものだったが、現在では位置に応じてそれらが変動する複雑な関数空間がさかんに研究されている。それによって解析学も日々進展しており、中井教授の研究人生もその進化とともにある。「年に5〜6本、最近は結構ハイペースで論文を書いています。もう、夢中で」。その長年の努力と功績が称えられ、2022年度日本数学会解析学賞を受賞した。

人生初めての論文を世に出したとき、中井教授は茨城大学大学院のマスターの学生だった。生まれ育ったのは茨城県の笠間市。学校の授業以外でも数学のことを考えているのが好きで、数学者への憧れを抱いて茨城大学に進学した。

当時の指導教官である藪田公三教授の導きで現在の研究分野に取



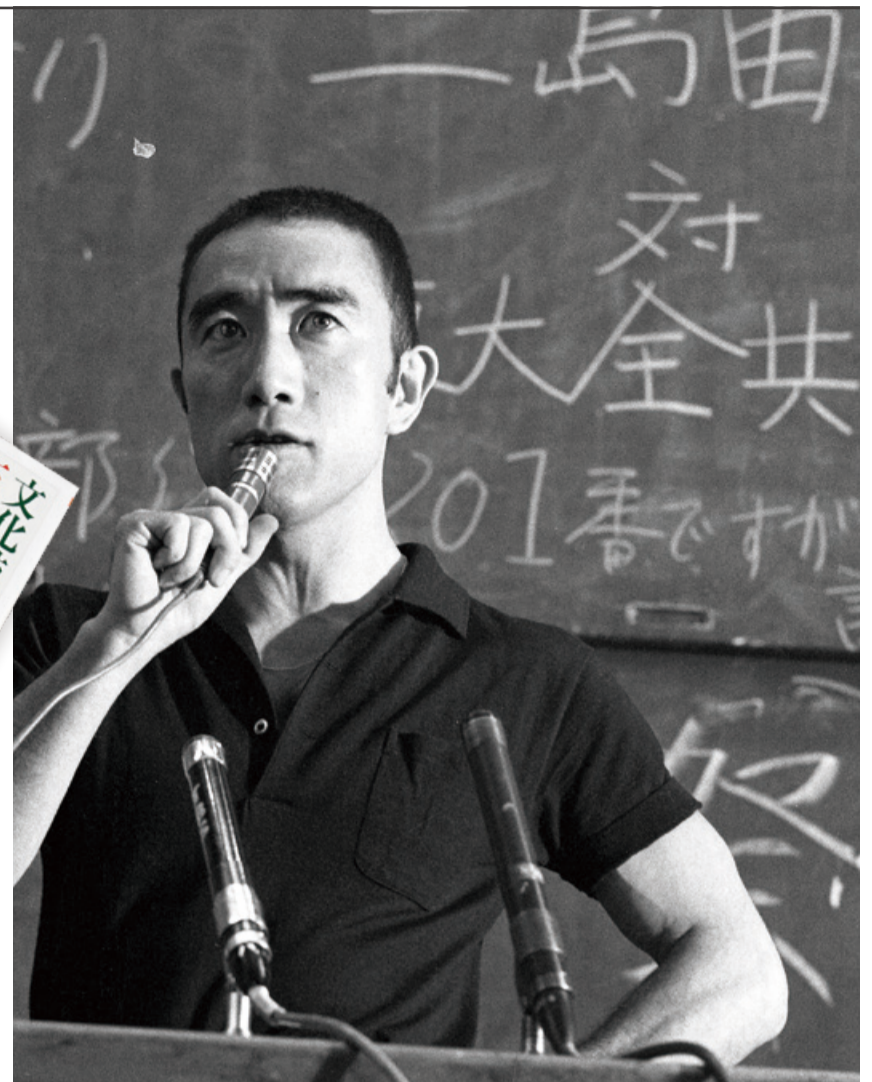
COLUMN

茨大の「あの日」

1968年11月16日
三島由紀夫が
茨大講堂で講演



「文化防衛論」の中に鮮明な記録が残る、茨大生と三島由紀夫との“真剣勝負、



こちらの写真は東京大学で講演する三島由紀夫。残念ながら茨大の講演時の写真は見つかっていない ©Shinchosha/毎日フォトバンク

作家・三島由紀夫(1925〜1970)の『文化防衛論』という本には「学生とのティーチ・イン」という項があり、3つの大学で行われた「国家革新の原理」という演題の講演と討論の記録が収録されている。そのひとつは、1968年11月16日、場所・茨城大学講堂、主催・茨苑祭実行委員会とクレジットされている。

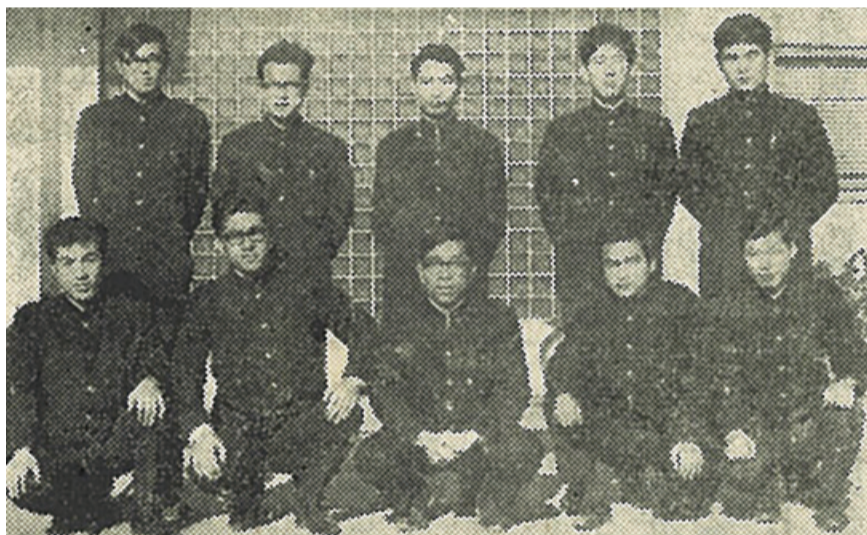
当時文理学部の3年生だった元茨城大学理事の影山俊男(75)は、その日の熱気を覚えている。国防色のセーターとパンツ姿の三島の全身から満ち溢れた自信、豪傑な笑い声。ひしめく聴衆。「小説家の話と思って聞きに行ったのに、まさかこんな話をするのかと。言葉の力に圧倒されました」と振り返る。

三島の講演を企画したのは、影山の1年先輩で校友会の会長を務めていた小野瀬武康(76)だった。時代は学生運動真っ盛り。茨大の学生の組織も政治的立場を異にする校友会と自治会とに分かれ、文化祭も分裂を起していた。「大学を正常化したい」そう願う小野瀬は、学生の心をまとめる力をもった人物の講演会を構想した。

同年10月、小野瀬は茨苑祭実行委員長とともに早稲田大学の大隈講堂での三島のティーチ・インに参加し、その後寿司屋で行われた懇親会にも参加。三島本人と直接面会を果たし、講演を依頼した。「すごいオーラでした。圧倒されそうでしたけど、茨城大学の代表として臆せず話をしようと努

めました」と小野瀬は振り返る。その場で承諾を得た。

茨大の講堂いっぱいの参加者を前に、三島は、日本のために護るべきものは何か、行動のモラルの根拠として置くものは未来なのか、それとも現在や過去か、そう問題提起をした。それに対して学生たちはイデオロギーの存在価値を主張する。真剣な言葉同



当時の校友会役員たち。前列中央が小野瀬氏

士がぶつかる緊張感が記録文からも伝わってくる。

講演の後、水戸・大工町の割烹「魚政」で三島を囲んで食事をした。謝金を手渡すと、三島はひっくり返したのし袋に「三島由紀夫」と書き記し、その謝金にポケットマネーを足して返した。「がんばれよ」の言葉とともに。「しびれる思いがしました」と語る小野瀬の口調に当時の興奮が蘇る。しかし、その2年後の1970年11月25

日。三島は自衛隊に決起を呼びかけたあと自決する。その衝撃を小野瀬も影山も未だ忘れることはできない。

それから半世紀が経った2017年。この講演記録を読んで茨城大学への進学を決めた一人の学生がいた。阪井一仁(24)だ。相手を尊重しながら自分の思うことを伝える三島の議論の進め方に影響を受け、自身も小野瀬の口調に当時の興奮が蘇る。しかし、その2年後の1970年11月25

ンパス近くの一室を借り、数人のグループで講演記録を読んで議論した。在学中には自衛隊の活動も経験した。「学生とのやりとりを見ても、三島さんは一切手を抜かない。自分も一生懸命あり続ける人間であろうと決めました」。その思いで進路について悩み抜き、今は教育書の出版社で文字どおり「一生懸命」に仕事に取り組んでいる。

三島との出会いで生き方を真剣に考えた、というのは小野瀬も同じだ。大学卒業後、茨城県庁に勤めた小野瀬は、仕事の傍ら剣道を習い始め、国際貢献活動も立ち上げた。ついにはフィリピンに剣道場を創設し、指導者を育てるところにまで至った。そして72歳で剣道六段審査に合格した。「命のはかなさがあるからこそ人生を大事に生き、自分の頂点を窮める」、三島の美学をそう理解し、今も実践する小野瀬。「茨大でもこんなことができたんだよ、ということを今の学生のみなさんにも伝えたい」と力強く語った。(文中敬称略。年齢は2023年3月1日現在)



久しぶりに茨大キャンパス内を散策する小野瀬武康氏



三島が講演を行った講堂の前に立つ影山俊男氏



三島の講演記録を読み、茨大への進学を決めた阪井一仁さん

*三島由紀夫の茨大での講演時の写真や当時のサイン色紙を探しています。心当たりのある方はぜひ茨城大学広報室(TEL:029-228-8008)へご連絡ください。

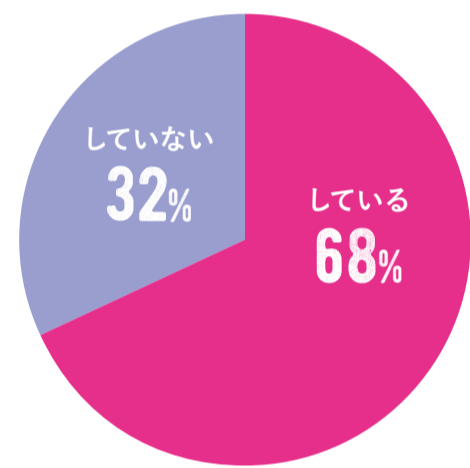
茨大生100人アンケート!

第1回「茨大生のアルバイト事情」を大公開!! 茨大生の時給や1週間あたりの勤務日数は?!

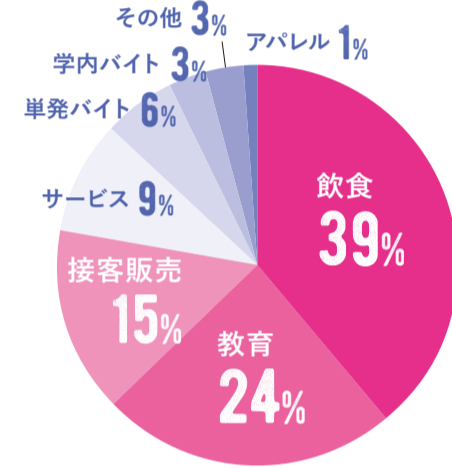


この企画では茨大生の実態に迫るべく毎号テーマを設定してアンケート調査を実施し、その結果を大公開していきます! 第1回のテーマは「茨大生のアルバイト事情」。アンケート調査に協力してくださった皆さん、ありがとうございます!

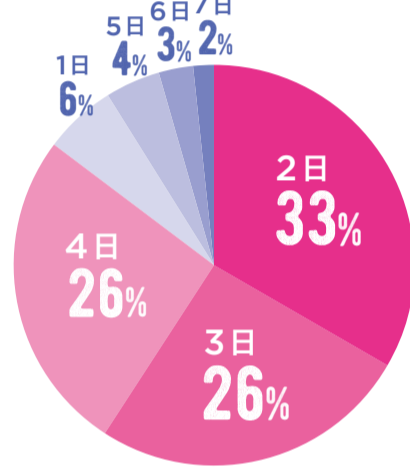
Q1 現在アルバイトをしていますか?



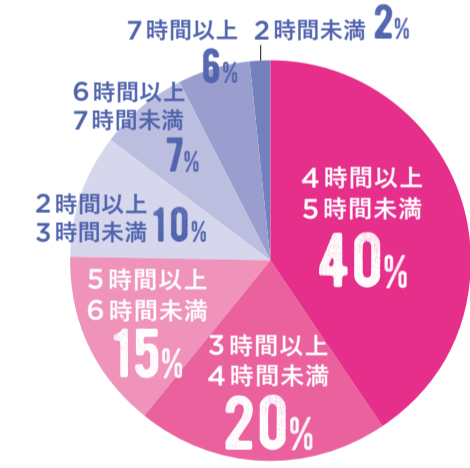
Q2 どんなアルバイトですか?



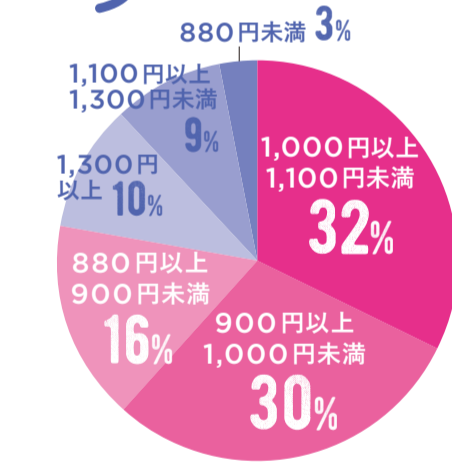
Q3 週に何日アルバイトをしていますか?



Q4 1日の平均労働時間は?



Q5 時給はいくらですか?



調査方法: Microsoft FormsによるWeb調査

調査期間: 2022年7月2日~7月13日
アンケート回答者の所属学部内訳: 人文社会科学部60名/理学部6名/教育学部13名/工学部17名/農学部5名
回答者学年内訳: 1年77名/2年14名/3年5名/4年4名/大学院生1名

今回、茨大生100人にアルバイトに関するいくつかの質問をしたところ、上のグラフのような結果になりました。現在アルバイトをしている学生が68%と過半数を占め、職種は飲食が1番多くなっています。勤務形態について見てみると、週2~4日、1日当たり平均4時間以上5時間未満といった無理のない勤務が窺える回答が多くを占める中、ブラックバイトと思わせるような回答もチラホラ…。あくまでも学生の本分は勉強。学業とアルバイトとを上手く両立していけたらいいですね。アルバイトと言えば気になるのは時給。900円以上1,100円未満との回答が過半数を占めました。現在のアルバイトを選んだ理由も調査しましたが、時給を理由とする回答が圧倒的に多かったです。やはりアルバイトを決めるにあたって、時給の高さは重要な決め手ですね。

アルバイト代の使い道についての質問には、初めて

のバイト代で家族にプレゼントを買うことを考えているという素敵な回答がありました。回答者の多くの方が趣味の充実や服の購入、交際費などに充てている一方で、アルバイト代で自ら生活費を賄っているという回答も同くらい見受けられました。中でもっとも印象に残る回答をしてくれたのは、教育学部2年の丸山桃歌さんです。彼女は、学費や生活費を自分で賄うために飲食業と塾講師を掛け持ちし、多いときで週7日間アルバイトをしていたことがあるそうです。「大学の課題が多いときは両立が大変ですが、バイト先の先輩や塾で教える子どもたちの一生懸命な姿が活力となっています」と丸山さん。また、アルバイト先で大学院生や高校生など幅広い年齢の人と交流できることがアルバイトの醍醐味であると話してくれました。回答者の32%を占める「アルバイトをしていない人」にもその理由を聞いてみたので紹介します。最も多か

ったのは時間がないという回答。学業、部活動・サークル活動との両立は難しいと感じる学生が多いようです。また、今回の回答者は1年生が多く、アルバイトを始める前に自動車の運転免許を取得したいからという理由も多く見受けられました。さらに、茨大ならではの理由として、2年生から日立キャンパスや阿見キャンパスに移ることが決まっている工学部と農学部の1年生にとっては、水戸キャンパス周辺で1年間限定で働けるバイト先を見つけるのが難しいといったちょっと切実な理由も耳にしました。以上が、茨大生のアルバイト事情のアンケート結果です。次号も茨大生の実態について調査し、大公開する予定です。どんなテーマがいいか、案を募集中です。募集フォームなどの詳細は、P.16に掲載していますので、ぜひご覧ください!

茨大ほつとステーション

茨大生の暮らしを支える熱血茨大サポーターズをご紹介します!

私たち茨大生の生活を支えてくれている学内外のさまざまな人物にインタビュー。茨大生との関わりや想いなどを伺いました。



38年間大盛りカレーで茨大生の胃袋を満たし続けるピッチャーゴロ

SHOP DATA 茨城県水戸市袴塚3丁目11-2/12:00~14:30・18:00-23:30



今回取材で伺ったのは茨大から徒歩3分のところにある「レストラン ピッチャーゴロ」。大盛りのメニューで、茨大生の胃袋を長年満たし続けてきたお店です。店主の関根文夫(せきねふみお)さんに話を聞きました。

リユーム満点! この一品で満腹になること間違いなしです。どのメニューにもサラダと味噌汁、コーヒーが付き、メニューのほとんどはプラス80円で大盛りに変更できるというコストパフォーマンスの高さは、少なくとも大学近隣では他の追随を許しません。

今回の取材で、ピッチャーゴロで提供される料理の量が、なんと年々少しずつ増えていることが判明! その理由は、意外にも水戸の陶器店の店舗数に関係していました。38年間営業するなかで、水戸の陶器店が次第に減少していき、やむを得ず購入先を変えるごとにお皿のサイズがだんだん大きくなっていき、それに合わせて料理の量も自然と増えていってしまったそうです。皿を小さくするのではなく一回り大きいものに替え、料理の量をそれに合わせて増やしてしまうところにも、関根さんの優しい人柄が表れています。昔懐かしさを感じさせるメニューの中で圧倒的な人気を誇るのが、カツカレーです。トロみのあるカレーの上にサクサクと揚げられたカツがのり、ポ

ピッチャーゴロは上水戸で数年間営業した後、38年前に現在の場所に移転し、以来現在地でずっと営業を続けています。店名の「ピッチャーゴロ」は、開店当時にプロ野球のテレビ放送が始まったこと、「飲食店の名前が濁点が入っている方が繁盛する」という噂があり、決めたそうです。メニューの内容は開店当時から変わらず、価格もほとんど据え置きというから驚きます。「これからもできるかぎり価格を変えずにいきたい」と話す関根さんの言葉に、店を利用する茨大生への優しい想いがにじみます。



通称「ピーゴロ」の店内はレトロな雰囲気。カツカレーのほか、ハンバーグも人気だそうです

学修から暮らしまで茨大生の毎日に密着して支援茨城大学生生活協同組合

SHOP DATA 茨城県水戸市文京2丁目1-1/9:40~16:30・土日祝日休み(ただし状況により営業時間変更の場合あり。詳細は生協HPにて)



木幅さんの推し本はコレ!

「情報生産者になる」

ちくま新書
著: 上野千鶴子
本体: 920円

「タイトルだけを見ると大学生には少し難しく感じるかもしれませんが、これこそ大学生が読むべき本の一つだと考えます。論文を書くにも研究をするにも、まず大切なことは「問いをたてる」ということ。その上で適切に情報収集~分析をし、論文を書いていくわけですが、本書にはその全てが丁寧に順序立てて記されています。この力を身につけることは、大学卒業した後も自身を助ける一つのスキルになると思います」(木幅さん)

大学生活になくはならないのが、大学生協の存在です。茨城大学生協で購買部の店長を務めている木幅純也(こはたじゅんや)さんに話を聞きました。

茨大生協では、各種ショップの運営だけでなく、茨大生の就職支援を行う茨大キャリアセンターや「資格の大原」と協同して公務員試験の対策を行う講座の運営サポートや自己分析講座、新入生向けのスタートアップセミナーを行うなど、多様な面から茨大生の学生生活をサポートをしてくれています。

現在書籍担当者と一緒に力を注いでいるのは、生協書籍部と茨城大学生協学生委員会(GI)が協同で実施している「推し本企画」です。店長の木幅さんは、現在おもに水戸キャンパスの「生協サービスショップ」に勤務し、学生のパソコンに関する相談や学生向けの旅行や自動車教習所の案内などを担当しています。同時に、学生から提案されたさまざまな企画やアイデアについて、日々詳細をチェックし、実現に向けたサポートを行うことも木幅さんの重要な役割。「私自身が大学時代に生協の学生委員会の活動から得たものが大きく、学



訪れる学生たちに丁寧に対応する木幅さん。書籍部の推し本コーナーには選者のコメントも添えられています

先生、ちょっといいですか？

～茨大教員の素顔を調査！～

茨大教員約600人の中には意外な趣味や特技を持つ人物が…?!



大学では小中高ほど先生たちと密接な関わりを持つことが難しいと感じている学生も多いかもしれません。ここでは茨大で教える約600人の教員の中から、2名の先生を編集部の独断で取り上げ、その素顔に迫っていきます。自分と共通の趣味をもっている先生が見つかるかも?! 先生たちとの距離を縮めるきっかけにしてみてください。

F・フォーサイスに感化され 欧州に興味を持ち哲学の道へ



教育学部 学校教育教員養成課程 教育実践科学コース

小川 哲哉 教授

普通の授業ではとても真面目な印象を受ける小川先生ですが、素顔ははどのようなか気になり、インタビューしました。

どのような研究を専門にされていますか。
「元々は、教育哲学・思想史、特にドイツの精神科

学的教育学についての研究をしていました。今は、道徳教育について研究しています。茨城県の道徳教育の推進委員長もしています」

休日はどのように過ごしていますか。
「ドライブをしたり、映画を観たり、ギターを弾いたりします。でも、たいていは休日でも仕事をしているような感じですかね。やはり教育問題のテレビ番組や新聞に目が行くことが多いですし、研究者として目を通しておくべき本もたくさんありますから。原稿や論文を休日にまとめることも多いですね」

読む本は専門分野に関連したものが多くですか。
「もちろん専門に関連する本はよく読みますが、小説も好きです。私の人生を変えたと言える本は、じつは哲学書や金言・格言書の類ではありません。フレデリック・フォーサイスの処女作『ジャッカルの日』です。この本は国際的な謀略を描いた小説で、元フランス大統領シャルル・ドゴールの暗殺を行う際のコードネーム「ジャッカル」を、警視レベルが阻止しようとするマンハント（編註：逃亡者などを組織的に捜索する）の物語です」

具体的に先生の人生にどのような影響を与えたのでしょうか。
「この本をきっかけにヨーロッパに興味を持つようになり、大学院では哲学研究室に進みました。ただ、フランス語ではなくドイツ語を学んだのは、フォーサイスの2作目『オデッサ・ファイル』（編註：青年ドイツ人記者がナチの戦犯の秘密組織の秘密を暴こうとする物語）で興味を持ったからです。この本で翻訳者・篠原慎さんの翻訳技術に触れたことは、ドイツ語の教育学の教科書の翻訳の際にとっても役立ちました」

終始とても楽しそうに話をしてくださる姿が印象的でした。読書だけでなく、車・映画・音楽と多趣味な小川先生。きっとおすすめを教えてください。気軽に声をかけてみてください！



小川先生私物の『ジャッカルの日』の日本語版・英語版・ドイツ語版で、英語の朗読CDまでお待ちください

休日は教会での活動に勤しむ 時にはインターネットゲームも



人文社会科学部 人間文化学科 大島 聖美 講師

穏やかな人柄で人気の大島先生。インタビューを通じて、大島先生の意外な一面を覗いちゃいました！

どのような研究を専門にされていますか。
「発達臨床心理学の領域について研究しています。特に青年期の家族関係を研究テーマにしていま

す。相談室としての機能も兼ねているので、一般の方の相談にも応じています」

先生はどのような趣味をお持ちですか。
「研究が好きなので、仕事が趣味のようなものですが、最近ではインターネットの戦争ゲームにハマっています。以前はほとんどゲームをしていなかったのですが、自分でもこのハマり方に驚いています(笑)」

ずばり、そのゲームの魅力はなんですか。
「他のプレイヤーと戦法を考え合いながらプレイできること。みんなで協力する感じが楽しいんです」

休日はどのように過ごされますか。
「私はクリスチャンなので、教会に行くことが多いですね。聖書を読み、牧師先生の説教(お話)を聞くことが礼拝プログラムのメインです。他には、黙祷や讃美歌の歌唱、使徒信条の朗読などを行います。茨大に赴任した際に、地域の教会を探してここに通うようになりました。教会で過ごす時間は、私の癒やしのひとときです」

今の茨大生に抱く印象を教えてください。
「授業のレポートなどを見ても、いろいろと考えてくれていると感じます。学生からの意見が与えられることも多く、とてもありがたいし、皆さんとても優秀だと思います。一方で、自己評価が低い

と感じることも多く、そこが少しもったいないなと思いますね。皆さん、とても理想が高い。日本人全体がその傾向にあるというデータがあるのですが、そうすると『できなかった』という体験が増えてしまい、自己評価も下がってしまいがちです。『ちょっと頑張ればイケる』という目標の設定を大事にしてみてください」

大島先生の意外な一面と優しい笑顔が印象に残る取材となりました。



休日の教会での様子(大島先生提供)

茨大関連施設にDIVE!

茨大のさまざまな関連施設を学生視点でレポート!



県内各地に所在する茨大の各キャンパスや関連施設の様子を学生視点からお届けします! 地域との深い関わりはもちろん、茨大生でも知らなかったことがたくさんあるかも?! 第1回は、茨城大学教育学部附属小学校へ潜入しました。

先端教育メソッドの実践の場

茨城大学 教育学部 附属小学校

茨城県水戸市三の丸2丁目6-8

茨城大学教育学部附属小学校(通称「附小」)は、教育実習で附小に赴く茨大生以外には、あまり馴染みのない場所。というのも、校舎が茨城大学水戸キャンパス内…ではなく、そこから少し離れた水戸市三の丸にあるからです。1958年に附属水城小・愛宕小の統合で発足して以降、附小は、さまざまな特色ある教育方針を貫いてきました。特に1年生から6年生の縦の繋がりを強める異学年活動「はらから活動」や、身近な学習対象と関わる総合学習の実践、異学年の少人数集団による複式学級の運営など、意欲的な教育メソッドへの取り組みで知られています。



附属小の外観。1~6年生 約600名が学んでいます

教育学部3年生の教育実習に密着しました!



教育学部の3年生は、通称「附属校実習」と呼ばれる教育実習に臨みます。今回は、附小で養護実習をおこなった教育学部養護教諭養成課程3年の飯田奈津紀さん取材。実習の様子を覗いてみます!

実習では、保健室を訪ねてくる児童に対応するほか、児童の注意を引くための工夫を凝らした掲示物を作成したり、いくつかの学級に出向いて熱中症に関する保健指導をおこなったりしたそうです。取材中にも保健室に体調を崩した児童が訪ねてきて、丁寧に対応する飯田さんの姿を見ることができました。「小学生にとって、自分の症状やケガの状態を言葉にして説明することは難しく、適切な問診、処置をすることは大変です」と飯田さんは話します。

また、実習中は1年生から6年生までの縦のつながりを強く感じたそう。附小の特徴的な伝統である「はらから」(同じ母親から生まれたきょうだいという意味)活動をとおして築かれた、責任感のある高学年の児童とその背中を頼りに学ぶ低学年の児童の関係性に、飯田さんは感銘を受けたといいます。「発達段階の違いにおける保健室対応の実態を深く学べた」と飯田さんは実習を振り返りました。

今回の取材では、教育学部附属小学校の児童たちや実習に臨む茨大生の様子を知ることができました。ご協力いただいた飯田さん、児童の皆さん、ありがとうございました!



取材に応じてくれた飯田奈津紀さん。児童を見つめる優しいまなざしが印象的でした。右の写真は、飯田さんが制作した熱中症に関する掲示物。手の込んだ仕掛けがたくさん!



PROFILE

青柳 直子 (あおやぎ・なおこ)

福岡県出身、2013年茨城大学教育学部着任、学長特別補佐(広報・学内コミュニケーション)、広報室長。専門分野は時間生物学、応用健康科学。趣味はスポーツと福岡ソフトバンクホークスの応援。



青柳室長からの指名を受け、今回の当コラムは
全学教育機構(バリアフリー推進室)
学生相談カウンセラー 沼田 世里
が担当します。

Starting Strong —— 附属幼稚園を通じて茨大が取り組む幼児教育

茨城大学教育学部には、4つの附属学校園(幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校)があります。実は、茨大生や茨大教職員の中には附属出身者が少なくなく、昔話で盛り上がることもあります。先日も、大学院生(附属幼・小・中学出身)の授業引率で附属幼稚園に行った際、「おやつ先生」と20年ぶりの再会!ということもありました。また、附属生の保護者の中には、ご自身も附属出身だという方も多く、地域の皆様によって多大なご支援やご協力をいただきながら附属の長い歴史は紡がれてきたと言えます。

附属学校園は、教育実習などの教育実践だけでなく、茨大教員と連携

しながら教育・研究活動を展開する場となっています。その他にも、例えば附属幼稚園では県内外の園長・教員の学びの場としての公開保育をはじめとした、さまざまな研修を行うなど、茨城県の幼児教育を牽引し、地域の子育て支援のモデルとなるという役割も担っています。

その附属幼稚園で、私たちは本学からの研究支援を受けつつ、子どもたちの生活、健康や運動に関する共同研究(教育学部・神永直美園長/教授、同保健体育・渡邊将司准教授)を約8年行っています。コロナ禍で運動不足になったり、メディア接触時間(スクリーンタイム)が増えたりといった大人と同じような姿が、縦断研究の中で明

らかになっています。子どもの生活の様子を可視化してお伝えしたり、手軽にできる運動遊びをYouTube配信したりするなどして、保護者の子育て支援にも繋がっています。

近年、世界中で乳幼児教育への関心が高まっています。さまざまな実験や追跡調査などから、乳幼児期の教育・保育の重要性が明らかになっており、OECD(経済協力開発機構)からは毎年のように「Starting Strong」(人生の始まりこそ力強く)というレポートが出され、乳幼児教育・保育の重要性が世界中に発信されています。輝かしい人生の始まりをガッツリ支える取り組みを、茨大ではより一層進めていきたいと考えています。

IBADAI News *Update*

茨城大学の最新トピックをお届けします!

教育学部3年の横山 黎さんが
ミステリー小説「Message」を
Amazonから発刊

2022年6月にAmazonのサービスを利用して初の著作本『Message』をリリースした、教育学部3年のミステリー小説作家、横山黎さん。同年11月に行われた全国大学ビブリオバトル2022茨城決戦大会にその『Message』を

引っ提げて挑み、12月の全国大会にも特別枠で出場しました。自著でバトルにチャレンジするのは異例で、会場からは驚きの声が上がりました。

▶ 20歳の誕生日を目前に控えた大学生・小山遊馬は、地元の東京都北区で成人式に参加した日の夜、歩道橋の階段から転落死する。

現場には「110」と読める血文字が残されていた。現場に駆け付けた警察官であり、遊馬の父親でもある順一は、成人式のあとの同窓会に参加した遊馬の地元の旧友たちに聞き込みを行っていく....

ダイニングメッセージがテーマの本作。「死に際に書き残すメッセージというよりは、余命僅かというときに家族に送るビデオメッセージのようなものではないかと。そういう本来の意味でのダイニングメッセージが小説で扱われることはあまりないと思って、それを追究してみたいと思ったんです」。

本格的なミステリー小説に出合ったのは、小4のとき。地元・東京北区の図書館に、同区出身の作家、内田康夫氏の本がたくさん並んでいて、読み始めたといいます。工作など、“つくること”が

好きだった横山さんは、小5から物語を書くようになりました。

中2のときに初めて懸賞小説に応募し、高2で「北区内田康夫ミステリー文学賞」奨励賞を受賞。「ミステリー小説作家」の一步を踏み出しました。

教育学部国語選修で学ぶ横山さん。創作スキルの向上については「授業などで本を読む機会が多く、いいなと思った表現などはメモに残したりしています。いろいろな本を読んで自分のスタイルを確立できたら」と話します。「これからどんな道を選んでも書き続けていくと思いますし、物語を綴っていかねければならない、その気持ちが変わることはないと思います」。

『Message』は、Amazonで購入できます。

EDITOR'S NOTE

▶ 初めての学生・教職員・地域の編集者という共同編集体制は文字どおり手探り状態! 対面&Teamsでの編集会議でタイトルからレイアウト、コーナー内容まで、ゼロから作っていきました。ご協力いただいたみなさんに感謝です。これで紙面や体制の基礎ができたので次はペースを上げて発行していきます!(広報室・山崎一希) ▶ リニューアルした茨大の広報紙「IBADAIVERS」はいかがでしたでしょうか。取材をとおして、茨大は在校生、教職員だけでなく、卒業生や地域の皆さんにも支えられていることを実感しました。後半の学生たちが担当したページも見

ごたえたっぷりです。学生、教職員、地域の編集者がともに作り上げた「IBADAIVERS」、ぜひ隅々までご覧ください。(広報室・藤田有紀) ▶ 茨大広報学生プロジェクト・広報紙編集チームで編集長を務めた盛島です。初めての企画・編集作業に戸惑うこともありましたが、こうして第1号を発行できることをとても嬉しく思います。これも「IBADAIVERS」の作成に関わってくださった皆様のおかげです。本当にありがとうございました。第2号も心躍るような企画をお届けしますので、どうぞお楽しみに!(茨大広報学生プロジェクト・盛島琉那)

広報紙「IBADAIVERS(イバダイバーズ)」は、茨城大学ホームページからもご覧いただけます。



紙面アンケートを実施しています。感想や次号で取り上げてほしい内容など、ご意見をお寄せください。



アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で10名の方にQUOカード(500円分)をプレゼント!(回答期限2023年5月末日)